

## 学生短歌会のこと 御手洗靖大

書肆侃侃房の短歌誌「ねむらない樹」5号では、学生短歌会の特集が組まれていた。私も同志社大学に短歌会があったことがきっかけで短歌を始めた。現在も一応学生短歌会の人間である。

各大学の短歌サークルはそれぞれに歴史があるが、大抵は消長を繰り返しており、世代ごとに断絶がある所も少なくない。歴史の長い早稲田大学短歌会の初発は、窪田空穂の講義後に集まった学生有志によって組織された歌会である。大正十五年のこと。歌会は雑誌「槻の木」を発行。やがて学生の歌会から結社「槻の木」へとなり、二〇十五年まで続く。戦後、この系譜を引く篠弘や来嶋靖生らが在学中に早稲田短歌会を立ち上げたが、結成を一九八六年とする現在の早稲田短歌会とは直接のつながりはないようだ。

大学の枠をこえた「学生短歌会」のようなつながりも、今に始まったことではない。例えば、佐佐木幸綱は早稲田大学在学中に國學院の岸上大作らと大学歌人会を再興している（一九六〇年）。六〇年代は学生運動の高まりとともに、歌壇においても学生が活躍する時代であった。

『佐佐木幸綱の世界11同時代歌人論II』には、「学生短歌の不振」と題された時評が載っている。一九八九年は『サラダ記念日』の影響で若い世代の作者が増えているものの、大学の短歌会ではなく、結社に入っていたようだ。この世代の学生歌人として、京大

短歌の吉川宏志が引用されている。現在と対照的である。

二十一世紀に入って、大学の短歌会が全国で次々に発足し始めたのは、二〇十四年前後。実は、全国的に（政治的な）学生団体が創設され始めるのもこの時期である。最も知られているのは、SEALSであろうか。この他にも大学の垣根をこえて学生が集い、「若者」として社会に参画しようとする集まりができた。六〇年代と通じる所があったのかもしれない。

年に二回、京都と東京で一緒に合宿を行うゆるいつながりが、「学生短歌会」というような全国的な組織意識へと変容するのは、ちょうど二〇十五年の角川主催「第一回大学短歌バトル」以降であろう。企画当初、運営側と学生間での意思疎通が必ずしも上手くいっていたとは言えず、学生側のコンセンサスを示す形で、「学生短歌会」という集団が生まれたと考える。ただし、これはあくまで意識であって、具体的な組織は現在存在しない。

二〇二〇年は、二〇十五年前後に学生短歌会にいた歌人の第一歌集出版が相次いでいる。昨年刊行だが山階基『風にあたる』、阿波野巧也『ビギナーズラック』、鈴木ちはね『予言』、榊原紘『悪友』である。鈴木、榊原の両書は第二回笹井宏之賞大賞受賞による刊行。阿波野歌集は、独自の韻律をたたえた歌に加えて、斎藤斎藤による現代短歌論と言うべき解説が付され、注目される。

サークルは、四年で世代交代をする。短歌会初期メンバーの卒業とともに、二〇十五年と現在ではやはり毛色がことなっている。高校以前から作歌を始め短歌甲子園に出場し、学生短歌会で活躍する歌人も増えている。学生短歌会と短歌甲子園とがどう繋がっているのか見ていきたい。